



ラグビーワールドカップ日本大会

「驚嘆！感動！」と「落胆、危惧」

1. はじめに

厚い胸板、太い首筋、盛り上がった肩の筋肉、太い腕と脚。鍛えられた百キロを越える体重の彼らの突進力は、軽トラックと衝突したときの衝撃に匹敵するらしい。防具も着けずにぶつかり合う 80 分間のゲームに、日本中が魅了されたに違いない。

しかし、今回のワールドカップで、私が強く感じたのは、A「驚嘆！感動」と、B「落胆、危惧」である。日本チームの奮闘や戦術面、ゲーム様相面の感動よりも、A,B を第一にあげるのには、19 世紀中葉のラグビーフットボールユニオン (RFU) の主張への思いがあるからである。

2. RFU の主張とは

暴力事件が横行した 19 世紀初頭のパブリック・スクール。その教育改革の先陣を切ったのは、ラグビー校校長のアーノルドであった。彼は、集団スポーツ (=フットボール) の有用性を活用しようとした。そして、①最上級生を監督生に任命し、生徒自らが学校改革の先頭に立つことを促し、②ルールなきフットボールを、秩序あるゲームへと改変するためのルールの成文化を生徒たちに委ねた。

19世紀初頭までのラグビー校のフットボールは、ランニングイン（ボールを抱えて走る）が禁止されキック中心のゲームであった。（注1）学校改革の指針＝「大英帝国を支える」人間にふさわしい**強靱なからだ**と、「公正さ」「勇敢さ」「不屈の精神」「無私の献身」「チームワーク」を重んじる人格（将来のクリスチャン・ジェントルマン）の養成には、『手でボールを扱うことのできるフットボール』の方が良いと判断し、ランニングインの採用へと舵を切った。そして、その卒業生たちが中心となって「高貴なる者の義務（注2）を果たし、文武両道に優れた人格者の組織」として（RFU）を設立したのである。

もちろん当時の組織は、中・上流階級としてのエリート意識やセクト主義が反映した「ジェントリー」の組織であった。その後、社会の発展と民衆のたたかいで、今では国民スポーツとなっている。（注1：19c初頭のイートン校では、ランニングインが禁止されていなかった、注2：高貴なる者の義務：古代ローマより続く思想で、身分の高い者にはそれ相応の社会的義務があるという考えで、今も残っており、イギリスの王子も進んで兵役や戦場に出むく）

3. ひたすら「前へ」「前へ」・・・A

「ひたすら！前へ、前へ」突進し、強力なタックルに倒されても、立ち上がり、前へ進む味方のサポートに走る。突進してくる相手がどんなに強くても、憶する事無く果敢にタックルを試みる。彼らの姿は、まさに当時の「RFUの目指す人間像」そのものではないか！ラグビーには、今も初心が生き続けている！と感じ、からだ中があつくなった。当時のラグビーもこのように激しく、ゲーム終了まで闘い続けたのだろう！・・・イヤ、待てよ！おかしいぞう～！

4. 何のためのルール変更？・・・B

ラグビーにはメンバーチェンジという考えはなかった。また、ゲームが始まれば監督コーチは観客席から観戦し、すべて選手の意志に委ねられてきた。ラグビーというスポーツは「文武両道」に優れた人格養成から生まれたと言っても良いものである。

ところが今大会では、①観客席の監督・コーチが常に無線で指示を出しているではないか！②ゲームが止まるたびにリザーブの選手が水を運びながら、監督・コーチの指示を伝えている！・・・アメリカンフットボールと同じとまでは言わないが、「勝利最優先に徹するスポーツ」に変貌していることに、からだの震えが止まらなかった。中・上流階級のエリート意識、セクト主義を克服してきたまでは良かったが、いずれ、一人ひとりの選手が「将棋の駒のごとく棋士に操られ」て動くスポーツになっていくのではないか！

文化としての「オフサイドルール」だけは残り、勝利のための合理主義が大手を振るのも、それほど遠いことではないのかも知れない。（船富公二）